

録音（昭和四十三年六月二十八日）福井県の在家

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讚の益、六つには心光常護の益、七つには心多歡喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には入正定聚の益なり。

私はどうしたことか、信前と信後の角目、水際を説くのに、全力を注いでいるが、母親の言い付けかもしませんね。あなたは、大学院の卒業が間近になっているが、「信仰の卒業ができたか」、という母からの手紙。皆さんには、信仰に卒業があるのかと思われるでしょう。私もそう思っていたのです。

人間は揚足を取ろうと思えば、誰でも取れる。気の付いた所は、注意して仲良く、足りない所は足してあげて、和合することが大事で、これが本当の僧侶だと思います。喧嘩して叩き落とすのが目的ではない。破邪顕正と言うことも言つてあるが、邪じや邪じやというて、悪口いうよりも、指導して上げるのが先覚者の使命、本当の坊さんだと思います。

母からの手紙であんたは学校を卒業するには、教育をしてもらつて教科書で卒業さしてもらうのだが、信仰の卒業をしたかと尋ねてきた。信仰に卒業があるのか、信仰を卒業したのなら、もう何にもせんでいいのではないかと思つたのです。

蓮如上人の御文章を読んでみれば、「すでに信心決定せしめたる人もあるべし、未安心の輩もあるべし、以ての外の大事なり」とおしゃっています。信仰が徹底し、親の誠で後生の夜が明けた人がおるが、未安心の輩もいるから以ての外の大事なり、卒業したのではあります。すでに信心決定せしめたる人もあるべし、信心決定さしてもらおうと思えばこそ求めて聞かせてもらうのだが、未安心の輩はまだそこまで到達していない。だから、信前信後をはつきりしなければならないという。それであんたは学校をでただけで、それで信仰がすんだと思つたら大間違い、あんたは書物の上を通して観念の遊戯をしている、聖教は体験された方がお書きになつたもの、それを見て読んでいるのは、合点であり理屈がわかつただけ、信仰の真似に過ぎない。

同行はどうしたら苦が抜けかるか、どうしたら唯になれるか、耳には聞いたが腹が承知せんと、実地問題で泣いている。あなたは説教をするとき、お聖教の定規を通して、信前と信後の区別をはつきり説いてあげなさい、それには自分が通らなければ人を導くことはできぬい、自分が体得出来たうえで、信前信後を説いても、聞き切らないのは同行の罪、それを聞かせ切らなのは坊さんの罪になる、あなたがはつきり説いても聞き切らないのは、同行の程度が低いのだから罪にはならないが、坊さんが説き切らないとしたら、お布施を頂きながら責任が済まないぞ、という手紙を母がよこした。

それから、卒業論文を放棄して、お聖教、教行信証真仏土巻を読まして頂く、化身土巻は始めは問題にしていなかつたのですが、方便を知らなかつたら眞実は判らない。眞実を体得した人でなければ、方便でうろついていたことが判らない。御文章を読むと、たとえ罪業深重なりとも、必ず救う、必ずには間違はない、大地にうちおろす槌に間違いはあるつても、本願力の不思議さには、間違いないとかたく信じていたが、それは話がわかつただけ、それでいいかいと腹をつかれると、どうもないという奴が出て来る。

法の尊高はわかるが、まだ機の下劣が判らない、悪い奴をお助けと進んできたのですが、、仮智の不思議、如來の念力、我よく汝を護らんの勅命が届いたとき、どれだけ飛び上つて喜んだかわからない、どうして届いたのか、そこが聞きたいのでしよう、聞いて真似をするのも結構、学ぶ、まねる、真似から本物になる、初めから能筆はおりませんよ、だんだん上手になつていく。お育てを蒙つていく、名号に向いて進んでいく、どう頂いたらいいのか、嘘とは思わないが、何故私は苦がぬけないのかと進ませて頂く。そうやつて進んでいくのが、二十願の果遂の誓いという、何を果たし遂げさせてやるのか、仮智の不思議に、円満の大慈悲の中にとろけさせあげるといふ誓い。

二十願の名号も、十八願の名号も、どつちも名号に変わりはないが、どつちも十方法界を照耀しているが、私が握つていこうとするのが、桁をおとしているから二十願、名号の独り働きで夜が明けたのが仮智の不思議で、それを一念の信といい、一念の信の内容を開いたのが、二種深信という言葉です。

一種一具だから、一遍で話はできない。いつも、機を先に出して説教をするというが、本当に墮ちる者はこういうものだと教えなればわからない、三毒の煩惱はお救いというが、三毒の煩惱のような簡単なものではない。十八願から捨てられた機態が、悪人正機のねらい。あんたの腹はこういうものじやぞと教えている。

弥陀の名号は、光明無量と寿命無量、光明無量は、空間的無邊で何処でも救う、寿命無量は、時間的無限でいつでも救う、いつでも、どこでも救うのなら、今、ここで救うて下さい。それが平生業成ということ。無理に死んでからと向こうにもつていかなくともいい。

真宗は心命終、心が死ぬという。自力がここまで引っ張ってくれる。聞いたも知つたも道理も理屈もわかつたが、判らん心が残つている、逆説の屍がでてきた、あなたの本心はてれつとした心、逆説の屍がわかつてきたら、これが墮ちるに間違いなしと自覚がついて、調熟の光明のお育てをこうむり、唯とは不思議だつたと同時に夜があけた時が、二種一具という。私は機ばかり突くというが、自惚れているから、徹底的に叩き落してやらねば眼が醒めんと必死に機ばかりついて説教している。だから機ばかり突くように見える。法の説教をすれば機はみえるから、法の説教をすればいいじゃないかというが、機を抜きにした法があるか、

十劫の昔に助かつてているというが、それは十劫安心、十劫の昔に助かつてているのではなくて、助ける腕前ができるていているだけで届いていない、それが届いたら、一念の信定まらん輩はで、十劫の昔正覚を取つた親の腕前が届いた時、信楽開発で目が醒めた、それを専門語で念劫融即、十劫の昔の親の腕前を全領して、身も心も南無阿弥陀仏で、とろけあう。

光明無量が届いたときが、夜が明けて、疑いが晴れた、これが信。寿命無量の念力が届いて、再び迷わぬ身になつた大自覚がついたから樂しむ、信楽開発と心の扉が開ける、それまではうんともすんともいわない、心中閉塞、呆れた世界にでたから、信は信心、樂は歡喜で、信心歡喜と踊り上つて喜ぶ。

素直な人間、岸に腰掛けている人間が船に乗せられたので喜べるか、溺れて汐をのんでいる人間が助けられたら大喜び、ああ助かつたとい大満足ができる、時間に何の用事があるか。

あなたはいつも機ばかり説く、法を言えというが、それなら尋ねるが、機を抜きにした法があるか、どこの処でも機が先に出ている、我が機は悪きいたずらものとおもいつめて、機が出ている、かかる機までもお助けと蓮如さま、親鸞聖人は「一切善惡凡夫人」機が先に出ている如來の弘誓願を聞信すれば」善導さまの二種深信も、おちる機が先にでている。法の深信を先に言つて、後から機の深信を言つてお説教になるか、お助けぞ、金剛の手はちぎれてもお助けぞ、それじやが堕ちるのじやぞで、説教になるか。墮ちる機態を知らない、三毒の煩惱しか知らない、三毒の煩惱のような簡単なものでない、法の鏡に照られた十八願の正所被の機は、何か、唯除五逆誹謗正法、除く、親殺しをしたことはないか、法を誹つたことはないか、親を殺したのは阿闍世太子、法を誹つたのは提婆達多と、三千年前のことのように思つてゐるが、あなたや私が皆が張本人と言ふことに気がついた時でなければ、墮ちるということが判らない。宿善が厚いと自惚れているが、墮ちる人間が判らなかつたらお助けは判らない。一種一具だから。